

いちのたにふたばぐんき

一谷嫩軍記

〔解説〕宝暦元年（一七五二）十二月、豊竹座初演。並木宗輔（千柳）・浅田一鳥・浪岡鯨児（なみおかげいじ）・並木正三らの合作。「平家物語」「源平盛衰記」を基に、敦盛（あつもり）最期と忠度（ただのり）都落を中心に脚色したものである。三段目までは並木宗輔が書いたがこの段が絶筆となり、その後は一鳥らが完成させた。

〔ここまでのあらすじ〕源義経は、家臣、熊谷次郎直実に弁慶筆の「二枝を切らば一指を切るべし」と書かれた制札（立て札）を渡し、熊谷は我が子小次郎と共に出陣する。一谷の合戦では、小次郎と平山武者所が先陣争いをするように斬りこんでゆく。後から駆けつけた熊谷は、負傷した小次郎を陣屋（軍兵の詰め所）へ連れ帰る。その後、平家の陣内から大将敦盛が現れ、逃げる平山を追って行く。その頃、敦盛の許嫁玉織姫（たまおりひめ）は敦盛の姿を求めて須磨浦をさまよう。そこへかねてから姫に横恋慕する平山が近付き、我が意に従わせようとするが、靡かぬのに腹を立てて姫に刃を向ける。

〔組討の段〕一方、敦盛は平山を見失い、ひとまず沖の味方の船へ戻るため、馬を泳がせるが、熊谷が勝負を挑んで呼び止める。二人は馬上で打ち合い、互いに馬から落ちた時、熊谷が敦盛を組み敷く。熊谷は敦盛に、思い残すことがあるならかなえてやろうと情けをかけるが、敦盛は自分の死骸を父に届けて欲しいとだけ頼む。健気な振る舞いに心打たれた熊谷は、助けてやろうとするが、それを平山に責めたてられ、進退極まってついに首を討つ。（そこへ瀕死の玉織姫が這い寄り、見えぬ目で敦盛の首と名残を惜しみつつ息絶える。）熊谷は無情を悟り、敦盛の首を抱いて帰路につくのであった。

組討の段

去る程に、御船みふねを始めて、一門皆々船に浮かめば
乗り後れじと、汀みぎわに打寄れば、御座船ござふねも兵船も、遙
かにのび給ふ。

無官の太夫敦盛は道にて敵を見失ひ、御座船に馳
着いて、父経盛に身の上を告げ知らすことありと、
須磨の磯辺へ出でられしが、船一艘もあらざれば
せんかた詮方波に駒を乗入れ、沖の方へぞ打たせ給ふ。かゝ
りけるところに後より、熊谷次郎直実。

「ヲ、イ、〜」
と声をかけ駒を早めて追っかけ来り、

「ヤアそれへ打たせ給ふは平家の大将軍と見奉る。
正まことなうも敵にうしろを見せ給ふか引返して勝負あれ。
かく申す某は、武蔵ノ国の住人熊谷次郎直実見参せ

ん返させ給へ」

と、扇を上げて指招き、

「暫し〜」

と呼ばはったり。

敵に声をかけられて何か猶予のあるべきぞ、敦盛
駒を引返せば、熊谷も進み寄り、互ひに打物抜きか
ざし、朝日に輝く劍つるぎの稲妻かけ寄り、かけ寄せちや
う〜、蝶の羽がへし諸もろあふみ鐙、駒の足並かつしか
つし。かしこは須磨の浦風に鎧の袖はひら〜
群れゐる千鳥村千鳥むら〜ぱつと、引汐に、寄せ
ては返り、返りては又打ちかくる虚々実々。勝負も
果てしあらざれば、

「いそうれ組まん」

と敦盛は打物からりと投げ給へば、

「コハしをらし」

と熊谷も太刀投げ捨て、駒を寄せ、馬上ながらむす
と組む。

「えい」

「えい」

「えい」

の声の内、互ひに鎧を踏みはづし、両馬が間にどうと
落つ。すはやと見る間に熊谷は敦盛を取つて押へ、

「かく御運の極る上は、御名を名乗り直実が高名譽
を躰はし給へ。又今生こんじょうに何事にも思ひ残す御事あ
らば、必ず達し参らせん。仰せおかれ候へ」

と懇ねんじろに申すにぞ。敦盛御声爽かに、

「フ、やさしき志。敵ながらあつぱれ勇士、かく情
ある武士の手にかゝり死せんこと、生前しょうぜんの面目。戦
場に赴くより、家を忘れ身を忘れ、かねてなき身と
知るゆゑに、思ひおくこと、更になし。さりながら忘

れがたきは父母の御恩。我討たれしと聞き給はゞ、

さぞ御歎き思ひやる。せめて心を慰むため、討たれ
し跡にて我が死骸、必ず父へ送り給はれかし、我こ
そ参議経盛の末子、無官の太夫敦盛」

と、名乗り給ひしいたはしき。木石ならぬ熊谷も見
る目涙にくれけるが、何思ひけん引起し鎧の塵を打
払ひ、

「この君一人助けしとて勝軍に負けもせまじ、折節
外に人もなし。一先づこゝを落ち給へ。早う、」
といひ捨て、立別れんとするところに、後の山より
武者所数多の軍兵。

「ヤア、熊谷。平家方の大将を組敷きながら助く
るは二心に紛れなし。きやつめ共に遁すな」
と声々に罵るにぞ、熊谷ははつとばかりいかゞはせ
んと黙然もくねんたり。

「ア、愚かや直実、悪人の友を捨て、善人の敵を招
けとはこの事。早首討つてなき後の回向を頼むさも
なくば、生害せん」

とすゝめられ、

「ア、是非なし」

とつつ立上り

「順縁逆縁俱に菩提、未来は必ず一蓮託生」

「南無阿弥陀仏」

「南無阿弥陀仏」

首は前にぞ落ちにける。褰ほろをほどいて敦盛の御死骸
を押包み、総角あけまき取つて引き結び、手綱を手繰り結ひ
付ける。鞍の塩手やしほしほと。弓手ゆんでに御首携へて、

右に轡の哀れげに、檀特山だんとくせんのうき別れ、悉陀太子を
送りたる、車しゃのく愿童子が悲しみも、同じ思ひの片手綱、

涙ながらに

※演者・時間等の都合により抜き差しがあります。